サイヤの王が幻想入り

マジュニアックマン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

叛旗を翻しフリーザに立ち向かうも敗れ去ったベジータ王は幻想の地で目を覚ます。

苦手な方はブラウザバックしましょう。

目　次

幻想の地 …… 1

幻想の地

「何処だ此処は？」
　目覚めた男―ベジータ王三世の目に飛び込んできたのは、見知らぬ天井であった。何故、こんな所で寝ているのであろうか？自分は確か、フリーザに挑み敗れたはずなのに。そう疑問を覚えながら、上体を起こそうとすると激痛が走った。
「グッ！」
　うめき声をあげながら、ベジータ王はそれ以上上体を起こすことが出来なかった。しばし、痛みに耐えながらじっとしていると此処からは見えないが、ドアの開く音が聞こえ誰かが入ってきた。その足音は、ベジータ王へと近づいてきた。ベジータ王がなんとかそちらに顔を向けると、そこには金髪の少女がいた。
「あら、目が覚めたみたいね。大丈夫？」
「貴様、何者だ？」
「私？私はアリス・マーガトロイド。魔法使いね」
「魔法使いだと？そもそも魔法とはなんだ？」
「魔法すら知らないのね。外来人でもそれくらいは知ってると思ったんだけど、相当の田舎者ってやつかしら？……それより貴方名前は？」
「この俺を知らないのか？サイヤ人の王、ベジータ王だぞ？」
「サイヤ人？何よそれ」
「まさかサイヤ人すら知らないとは、まあ良い。ところで、貴様、アリスだったか。此処は何処だ。俺はフリーザの宇宙船にいた筈だが？」
「此処は、幻想郷よ」
「幻想郷だと？聞いたこともないな。何故俺をそんな場所に連れてきた？」
「私がやりたくてやったんじゃないわよ。そもそもそんな事できないし」
　なら、誰が自分をこの幻想郷に連れ込んだのだろうか？フリーザたちがそんな事をする必要性は無い為、フリーザたちの仕業では無い事

は確かか。アリス曰く、そう言うことが出来る存在がいるらしいが、神出鬼没なので滅多に会えないとのこと。
「なら仕方ないか。アリス、此処のことを教えろ」
「はいはい、私が教えられる事もそんなに多く無いけどね」
　アリスの話を聞きながら、顔を動かし部屋を見れる限り見渡す。人形が多いが、それ以外は普通の部屋なのだろう。机の上に置いてあるスカウターも発見した。アリスの話を聞き終わり、ベジータ王は頭の中で情報をまとめ上げた。
「不思議な世界だ。何かしらの〝程度の能力〟や〝霊力〟に〝魔力〟聞いたことのないものばかりだ」
「まあ、そうでしょうね。それより、あなたの事も教えてもらえないかしら」
「良いだろう。貴様はサイヤ人すら知らん様だからな。そこから教えてやろう」
　先とは変わり、今度はベジータ王がアリスにサイヤ人について教え始める。流石に想像を超えていたのか、途中からアリスは頭を抑えていた。
「――そして、そのサイヤ人の王こそがこの俺と言うわけだ。……どうした？」
「いや、ちょっととんでもない拾い物しちゃったかなって後悔してる所よ。まあ、今更後悔しても遅いんだけど」
「何を言っているのかわからんが、俺としては他の仲間がどうなったかが気になるところだ。勇敢な戦士達だったからな。フリーザに一矢位は報いていれば良いが」
　フリーザと戦う際に集めたエリートサイヤ人達の顔を思い浮かべながら、ベジータ王はそう呟く。自分と同じく幻想入りしているのか、それとも死んだか、それはわからない。もし、幻想入りしているのならいつか会えるだろう。
「さて、メディカルマシーンも無いようだからな。俺は眠る事にする。……それと、流石に命を救われたのだ。恩はいつか必ず返す」
「あら、意外と義理堅いのね」

「当然だ。死ねばもう二度と戦いを楽しめないからな」
笑みを浮かべそう言いながら、ベジータ王は眠りについた。